

選択性緘黙状態で広汎性発達障害児へのコミュニケーション指導

—QOL の変化に着目して—

特別支援教育・臨床心理学コース 特別支援教育専修
服部 真侑

1. はじめに

本研究では、選択性緘黙状態で広汎性発達障害である小学校3年生の男児に対し、コミュニケーションボード（以下、カードとする）を用いてあいさつ語の表出を学校の特定の場面で獲得させ、そこで獲得された行動を他の学校場面に般化させることを目指した指導を行った。そしてその結果から、指導方法の妥当性について検討することと、支援の前後でのQOLの変化を検討した。

2. 方法

(1) 対象児 公立小学校通常学級に在籍する3年生の男児（以下、「A児」とする）3年生から通級指導教室に通っている。診断名は、広汎性発達障害であり、緘黙の診断はない。保護者からの報告では、幼稚園就園時から選択性緘黙を示している。家庭では、会話が可能である。学校では、児童支援専任の先生には、話すことができる。

(2) 支援期間 2016年10月から2017年2月

(3) 支援場所 A児の学級（男児11名、女児10名）

(4) 標的行動 言語行動「おはよう」「ください」「ありがとう」「おねがいします」「さようなら」をボードを用いて自発的に表出できることとした。

(5) 手続き

1) ベースライン：ボードを用いない状態で、言語行動の表出がみられるか否かについて観察を行った。

2) 指導場面：学校の日常生活場面から、4つの場面を設定した。担任教師は指導場面1（登校時に担任教師に対して「おはよう」のカードを見せる）、指導場面2（連絡帳を渡すときに「おねがいします」のカードを見せる）、指導場面3（連絡帳が返却される時に「ください」のカードを見せる）の指導場面4（連絡帳のスタンプをもらった時に「ありがとう」のカードを見

せる）指導場面5（下校時に担任に「さようなら」のカードを見せる）（1セッション1試行）を行った。スタンブカードであいさつ行動を強化した。社会的妥当性のアンケートを教員に行い、QOLのアンケート「KINDLR」を支援の前後で実施した。

3. 結果

1) 標的行動の習得過程とQOLの変化

ベースラインでは、標的行動が見られなかった。担任や級友、支援者のプロンプトにより標的行動を行ったが、自発には至らなかった。「ください」「ありがとう」では、教室以外の場所でも示した。また、QOLは上昇した。特に「学校生活」「友だち」の項目で上昇が見られた。

2) 担任や級友との関わり

社会的妥当性のアンケートでは肯定的な評価を得ることができた。担任との距離が近くなり、直接肩に触れて合図を行うようになった。担任自身もコミュニケーションの取り方がわかったとアンケートに記述があった。

4. 考察

1) 標的行動の習得過程とQOLの変化

標的行動の自発はほとんど見られなかったが、他の場面での般化が見られた。「ください」「ありがとう」の意味を理解したことが考えられる。また、担任や級友とのコミュニケーションの機会が増えた結果、QOLが上昇したことが考えられる。

2) 担任や級友との関わり

担任との距離が近くなったのは、コミュニケーションの機会が増えたことが考えられる。思わず声を出すことはあるが、話すきっかけには至らなかった。コミュニケーションツールとしてボードは有効であったことが考えられるが、発話の前段階にはならなかった。